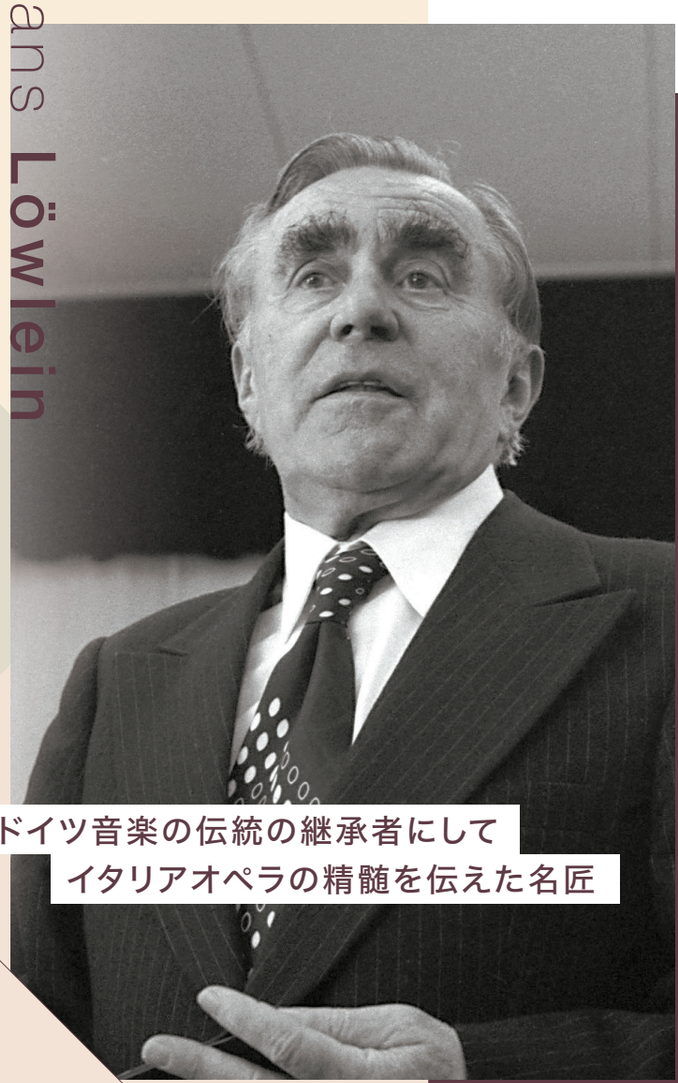
Hans Löwlein



ハンス・レーヴライン

指揮者

1909 - 1992

ドイツ音楽の伝統の継承者にして イタリアオペラの精髄を伝えた名匠

Profile

1909年、ドイツのインゴルシュタット生まれ。ドレスデン国立歌劇場指揮者、ベルリン・コーミッシェ・オーパー首席指揮者を経て、49年から61年までベルリン国立歌劇場の首席指揮者を務めた。東西分断の壁ができてからは西ドイツに移り、フランクフルト歌劇場指揮者、フランクフルト音楽院教授を歴任。69年の藤原歌劇団『カルメン』以来、来日を重ね、同歌劇団や旧・新星日本交響楽団への客演、昭和音楽短期大学、東京声専音楽学校の客員教授も務めた。

ドレスデン、ベルリン、フランクフルトの名門歌劇場でポストを得て、まさに筋金入りのドイツオペラの職人として、王道を歩み続けた名指揮者。その実力と温かい人柄で、20世紀の巨匠指揮者や名歌手たちの信頼も厚く、日本でもオペラとシンフォニーの両輪でその奥義を惜しげもなく披露してくれた、真の名匠である。

取材協力

元新星日本交響楽団楽団長
樽松 三郎

昭和音楽大学客員教授／指揮者
星出 豊（S38年度東京声専卒）

昭和音楽大学客員教授／フルート奏者
黒田 隆（S46年度短期大学卒）

昭和音楽大学講師／声楽家
中村 靖（S50年度短期大学卒）

昭和音楽大学企画広報部長
下八川 公祐

オペラ界の第一線で活躍したマエストロ

1909年にドイツ南部のバイエルン州インゴルシュタットに生まれ、ミュンヘン音楽院を卒業、ドレスデンとベルリンで活躍。1949年から12年間ベルリン国立歌劇場の首席指揮者を務め、61年に東西ドイツを分断する壁ができたことで、東側のベルリン国立歌劇場のポストを離れて西ドイツに移り、フランクフルト歌劇場でも活躍した。紛うことなき名指揮者の経歴を持つのが、ハンス・レーヴラインである。

メジャーレーベルの録音もあるものの、その数が多くないこともあるのか、不思議なくらい日本ではその名が知られていないが、ハンス・クナッパーツブッシュとは師弟関係にあり、ヘルベルト・フォン・カラヤン、オットー・クレンペラーといった大指揮者たちとは対等かそれ以上の立場での交流があり、名歌手たちにも厚く信頼されていたマエストロである。

「カラヤンに直接電話して“おまえのブラームスはなんだ”というようなことを話しているのも聞きました（笑）。カラヤンが電話を切らなかったことからも、レーヴラインの温かい信念は彼に伝わっていたのでしょう。劇場関係者も彼には一目も二目も置いていました。レーヴラインが育てた、あのペーター・シュライアーは、『フィガロの結婚』〔モーツァルト〕のバジリオ役のために、“ハンスがやるなら絶対行く”と言って駆けつけるのです」（星出豊）

筋金入りのオペラ指揮者

レーヴラインの初来日は1969年、藤原歌劇団『カルメン』〔ビゼー〕での招聘だった。これをきっかけに来日を重ね、オペラの公演をはじめ、当時の新星日本交響楽団（その後、東京フィルと合流）の客演などによって、日本のオペラ、オーケストラのレベルを上げた功績は計り知れないものがある。

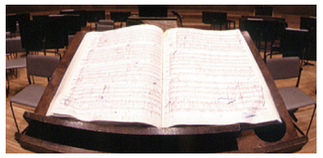
「レーヴラインは教えることが上手という以上に、人としての温かさがある。それにみんなが応えて、自分たちでやり方を見つけていく。新星日響に振りに来たときも、オーケストラが考えさせられるんですよ。“自分たちで考えて、オーケストラ全体の技量も含めて、まず提示してほしい。それに対して、僕がアドバイスしたい”というわけです。その指揮は、なんと言いますか……レーヴラインの棒を見ていると、歌手たちは軽くは歌えないんです」（星出豊）

「新星日響でも、レーヴラインさんが手を上げるだけで、それまで合わなかった音程が合ってきて、ハーモニーもぴったり揃うんです。彼の手を見ていれば、やりたい音楽がだんだんわかってきますし、各楽器が彼の要求する音になっていく。手をふと上げるとみんなの気持ちがぴったり合う。指揮者としての大事な部分でしょうね。本場のヨーロッパの音楽がどういうものかを教えてくれた最初の人といえると思います」（樽松三郎）

第9回『メサイア』公演で指揮するレーヴライン。（1984年12月、新宿文化センター 大ホール）

その一方、昭和音楽短期大学、東京声専音楽学校の客員教授を務め、多くの後進を育てた。それは本学にとっての大きな財産となったわけだが、特に1980年代前半の『メサイア』〔ヘンデル〕公演で、ドイツ仕込みの重厚かつ緻密な音楽によって、本学オーケストラの演奏技術、音楽性を飛躍的に高めたことは特筆に値するだろう。

「非常にロマンティックな作り方をされる方でしたが、『メサイア』もテンポはやや遅めで、最初のオーバーチュアもずっしりした指揮をされていました。当時、僕もその演奏から影響を受けました」（黒田隆）。まさに現役の名指揮者としてのヴィヴィッドな指揮法と指導により、本学全体にさらに熱い血を通わせたのである。ちなみに、レーヴラインの直弟子であった星出豊が所有する『メサイア』の楽譜は、クナッパーツブッシュ、レーヴラインが使っていた楽譜を受け継いだものである。



クナッパーツブッシュ*、レーヴラインの書き込みが遺された『メサイア』の楽譜。本学の公演でも使用されている。（星出豊所蔵）
*当初クレンペラーと考えられていたが、後の調査でクナッパーツブッシュの書き込みであったことが判明した。

イタリアオペラへの深い洞察

その経歴からもわかるように、レーヴラインは筋金入りのドイツ音楽、特にドイツオペラの職人だったが、それだけにイタリアオペラの重要性を説き、精緻な分析にもとづいて作品の精髄を日本人にわかりやすく伝えたことでも大きな功績を残している。

「例えば、ヴェルディはこういう書き方をしていても、ここはポルタメントをかけるべきなんだ、あるいは、この時代のヴェルディは、ここはかけないんだ、というようなことを明確に教えてくれました」（中村靖）

特筆すべきは、西洋音楽におけるベルカントの重要性を強調していたことである。

「歌はイタリアのものから学ぶべきだとおっしゃっていました。ベルカントを学んでからドイツ歌曲を学ぶのはいいが、最初からドイツ歌曲に取り組むべきではない。ピアニスト、声楽家などの音楽家は皆そうすべきであると」（下八川公祐）

ドイツ音楽の伝統を継ぐマエストロは、イタリアオペラ、またベルカントが西洋音楽の教育としてもっとも重要であることを伝えるために日本を訪れたのである。ドイツ音楽が主流であった日本の音楽界において、本学は創立当初から一貫してイタリアオペラ、そしてベルカント教育を基本軸としてきたが、ドイツ音楽の精髄を知るレーヴラインが本来の西洋音楽のあり方を提示したことは、その後の本学の発展においても大きな意味を持つこととなった。